

日本の詩歌

18

宮沢賢治

中央公論社

日本の詩歌 18

©1968

宮沢賢治

昭和43年3月5日初版印刷
昭和43年3月15日初版発行

価 480 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

春と修羅	第一集	5
春と修羅	第二集	125
春と修羅	第三集	201
春と修羅	第四集	267
三原三部		338
文語詩篇		343
疾中		364
手帳より		370
短歌		373

歌
曲

詩人の肖像

鑑賞

年譜

串田孫一

中村稔

374

宮沢賢治

心象スケッチ

春と修羅 第一集

序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといっしょに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電燈の

大正十三年四月、宮沢賢治は詩集『春と修羅』を自費出版した。

四六判三百二十ページ、定価二円

四十銭、一千部刊。彼はこれを詩

集とは呼ばず、「心象スケッチ」と

と傍題した。収められた作品は、

大正十一、二年の二年間に書かれ

たもので、この時期は、岩手県稗

貫郡立稗貫農学校（後の岩手県立

花巻農学校）の教師時代のほぼ前

半に当る。その後の作品を後に賢

治自身『春と修羅 第二集』と名

付けて編集したことから、出版さ

れたこの詩集を第一集と呼ぶのが、

数次の全集編集に際しての例であ

る。

第一集に収められた作品をすべ

て書き終え、詩集として刊行する

に際して記した、いわばマニフェ

ストがこの序である。そして、こ

こに賢治は、彼の作品が「心象ス

ケッチ」であることを宣言する。

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鈺質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちづけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅^{しゅら}や海胆^{うに}は

宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟^{ひつぎやう}こころのひとつの風物です

「わたくし」賢治は、自然の風物や周囲の人々と一緒に、「せはしくせはしく明滅しながら」ともり統ける電燈の照明である。その照明が自然の風物や周囲の人々を映し出すのであるが、賢治自身が時間の流れ、空間の交渉のなかでの一つの存在なのである。これを、彼は「有機交流電燈」と言い、また「因果交流電燈」ということばで表現する。

第一集の作品は、過去二十か月の間に紙とインクで書き留められた、賢治の心の風景のスケッチである。しかし、彼が心に感じるものは、また人々が共通して心に感じるはずのものである。

人は空気を呼吸しながら、うには塩水の中に生きながら、銀河系の星たちは宇宙に浮遊する微粒子物質を食べながら、それぞれの存在のほんとうの意味を考えるであらうし、ここに収めた詩篇はその契

ただたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで
ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中 みんなであるやうに
みんなのおおのなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代ちゆうせきせい沖積世の

巨大に明るい時間の集積はすのなかで

正しくうつされた筈はずのこれらのことばが
わづかその一点にも均ひとしい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を變じ

しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

機を与えるであらうが、それも結局は心に映つた風景の一つに過ぎない。ただ、一度確かに記録された賢治の心の内部の風景は、そのまま読者のだれもが心の内部に見ているはずなのだ。もしこれらの詩篇に現われる風景が虚無的に見えるとしても、それは人々の心に共通した虚無的な感情なのだ。なぜかといえば、彼の存在が時間と空間の交渉の中で、四囲と一緒に明滅する存在だからであり、言いかえれば、彼の心の中にだれにも共通するものがあるのと同様に、だれの心の中にも万人に共通するものがあるはずだからである。

この賢治の言言は、いわば主観主義の極致である。せんじつめれば彼の心に感じるもの以上に確實な実在はなく、これはまた万人に確實に感知されるはずのものである。だから自然や周囲の変化にまかせて詩人みずからの心に映じて

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料データーといつしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたったころは

それ相当のちがった地質学が流用され

相当した証拠もまた次々過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀くじやうが居たとおもひ

新進の大学士たちは気圈のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を発掘したり

あるひは白堊紀砂岩はくあきの層面に

くる事象を忠実に記録し、それによつて、詩人は讀者のすべてに共通した心の光と影とを探ろうとする。そのような詩法こそ、二千年間の詩作を通じて賢治が自覺的に会得したものであった。

この詩集をことさら「心象スケッチ」と傍題したことは、このような詩法の自覺に基づくが、一方で、これらの作品が詩と呼ばれる範疇はんしゆにはいるかどうかは、賢治の意に介しないところであつた。既成の詩という概念からはみ出してしまふもののあることを、彼が知つていたと理解してよい。そのゆえにこそ、この詩集が、わが国の詩の歴史に新しい衝撃を与えることとなつたのである。

もつとも、この序は引き続いて、これらの詩篇が地質学的にいつて新生代沖積世に属する現代において、正しく記録されたものではあ

透明な人類の巨大な足跡を
発見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として
第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日

宮沢賢治

つても、歴^{レキ}大な時間の流れから見れば、一瞬ともいえる短時間の間に、別の真実が発見されるかもしれない。それも我々が時間的空間的な制約の下に置かれた存在である以上、しかたないことだという反省に続き、だから二千年も後には、と、想像の翼を広げていく。

＊白聖紀 地質学上、中生代の最後の期をいう。約一億二千万六千万年前、爬虫類が栄え、羊歯類などが繁茂していた。

春と修羅

屈折率

七つ森のこっちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨^{おほ}きいのに
わたくしはでこぼこ凍^こったみちをふみ
このでこぼこの雪をふみ
向ふの縮れた亜^あ鉛^{えん}の雲へ
陰^{かげ}気な郵便^{きゆうびん}夫^そのやうに
(またアラッデイン ラン^{ラン}燈^{とう}とり)
急^{いそ}がなければならぬのか

周囲は明るいのに、自分は暗い雲の方向へ急いで行かねばならない。そういう詩人の自覚を主題としたこの作品で、詩集『春と修羅』は始まる。事実、この作品を書くことにより、賢治は習作期を脱して、詩人としての道を歩き始めたのである。

* 七つ森 国鉄田沢湖線小岩井駅のかたわらに点在する七つの森。

「アラッデイン ラン燈とり」は、千一夜物語中の「アラデインとふしぎなラングの話」に由来する。魔法のラングをとりにかくアラデインのように、という比喩である。

くらかけ山の雪

たよりになるのは

くらかけつづきの雪ばかり

野はらもはやしも

ぼしやぼしやしたり黝くすんだりして

すこしもあてにならないので

まことにあんな酵かう母ぼのふうの

朧おぼろなふぶきではあります

ほのかなのぞみを送るのは

くらかけ山の雪ばかりです

二十七歳の賢治を開んでいた自然は暗い。その中で、「たよりになる」もの、「あてにな」るもの、「ほのかなのぞみ」を詩人は模索している。この作品を貫くものは、どこか甘美な青春期の憂愁である。なお、鞍掛山は岩手山の東南麓、小岩井農場の北方にある。前作の七つ森は同農場の西南に当るから、賢治は光に背を向け、北へ向って歩いているわけである。

日輪と太市

日は今日は小さな天の銀盤で

雲がその面を

どんどん侵してかけてゐる

吹雪も光りだしたので

太市はいそいで毛布の赤いズボンをはいた

カーバイト倉庫

まちなみのなつかしい灯とおもつて

いそいでわたくしは雪と蛇紋岩との

山峽をでてきましたのに

これはカーバイト倉庫の軒

「太市はいそいで毛布の赤いズボンをはいた」という末行によって、読者はその前四行の自然観照から突然東北農村の生活に引き戻されるのである。賢治にとっては、銀盤のような太陽も、赤い毛布のズボンをはく農民太市も、ともに確かな実在であつた。この二つの方向がないまぜにされながら、賢治の世界が豊かに展開することとなる。

「カーバイト倉庫」は、国鉄釜石線岩根橋駅前の情景といわれる。

すぎとほってつめたい電燈です

(みぞれにすっかりぬれたのだから

烟草たばこに一本火をつける)

汗といっしょに擦過する

この薄明のなまめかしさは

寒さからだけ来たのではなく

さびしさからだけ来たのではない

恋と病熱

けふはわたしの額ひたいもくらく

鳥からすさへ正視できない

いもうとはちやうどいまごろ

つめたく陰気な青銅ブロンズいろの病室で

透明薔薇ばらの火に燃されだす

「(みぞれにすっかりぬれたのだから／烟草に一本火をつける)」とささやくのは、詩人の内心の声である。世の流れをさえぎる内心の声、あるいは詩人が向い合っている農民の声、それらの正確な記録が、賢治の詩作の交響的世界を形づくる。その萌芽を、この作品に認めることができる。

妹は病熱に苦しんでいるのに、自分の心も重くてつらいので、看護の手をさしのべてやることもできない。そういう引き裂かれた姿勢が、やがて妹の死に臨んで、「無声慟哭」における悲劇的高揚となる。この作品は、そういう意味で「無声慟哭」の母胎である。

ほんたうに けれども妹よ
けふはわたしもあんまり重くひどいから
やなぎの花もとつて行かない

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいろいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のぼらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの詔曲模様
(正午の管楽くわんがくよりもしげく
琥珀こはくのかけらがそそぐとき)
いかりのにがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を

仏教思想で、いつさいの生物は
善惡の業因によって六つの迷界
(六道) にいき別れるという。六
道とは、地獄道、餓鬼道、畜生道、
修羅道、人間道、天上道である。
修羅道にあつては、嫉妬猜疑の心
が強く、戦鬭を好むといわれる。
また、修羅は阿修羅の略であり、
阿修羅とは、本来生靈、神靈の意
であつたが、惡神の意に転じたとい
う。